イギリス科ニューズレター

July 2020

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

（8 号館 402 号室）TEL 03-5454-6304（直通）

Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
Web: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

主任挨拶

後藤春美

2020 年度主任を務めます後藤春美です。2014、2015 年度に引き続き、２回目となります。どうぞよろしくお願いします。

まず、昨年 10 月 19 日、東京大学ホームカミングデーに際し、イギリス科でも 5 年に 1 度の同窓会を開催できましたことをご報告いたします。右が当日の写真です。ご参加の皆様、ありがとうございました。

さて、2020 年度、イギリス科は３年生を５人、修士１年生を１人迎えました。しかし、今年度の新学期はイギリス科でも予想もしなかった形で始まりました。コロナウィルス（COVID-19）の影響により、4 月 2 日に予定していた対面式のガイダンスは中止となり、準備していたパンフレットをメールの添付ファイルで送るのみとなりました。すでに 3 月中旬、東京大学の授業はオンラインで行うことが決定されており、まさに目も回る状況でした。

COVID-19 がパンデミックとなるまで、天然痘は撲滅され、ペストなども制御可能となり、感染症の脅威はやや忘れられていた感がありました。ペストという言葉を聞いてイギリスを学ぶ者が思いを致すのは中世や 17 世紀、カミュだったのではないでしょうか。特に日本という島国では、水際作戦なるものが重視され、また、海外とのヒトの往来が少なかった時期にはある程度有効であり、お隣の韓国とは異なって 21 世紀に SARS や MERS の洗礼も受けていませんでした。水際を突破された場合についての準備はほぼ皆無だったと言わざるを得ません。歴史家・人口学者のエマニュエル・トッドは、「医療システムに割く人的・経済的な資源を削」ってきたフランスの過去 30 年にわたる政策を批判して「フランスは発展途上国の水準になりつつある」と述べています（5 月 23 日付、朝日新聞、朝刊 13 面）。PCR 検査数の問題など、我々もトッドの言葉をかみしめなければならないようです。

戦前の日本では結核という感染症が蔓延していたということは、皆さんよくご存じのことと思います。若者の間では剣道の面の共有を通しても感染が広がった、という話を聞いたことがあります。

私は 1987 年 10 月からオクスフォード大学大学院に留学したのですが、この際送られてきた「留学の手引き」のような冊子に、結核の多い国のリストが掲載されていました。当時、日本は依然そのような国の一つに挙げられており、「レントゲン写真を持参すること。持参しなければ到着後にレントゲン撮影をする」と書かれていました。長期間、学生寮で「密」な生活をするからでしょう。

私は、トトロの森の中のような雰囲気をたたえていた当時の駒場保健センターに赴き、事情を話して、その春の健康診断で撮影されたレントゲン写真をいただき、折れないようにスーツケースの底にしまってイギリスに持参したのでした。オクスフォード大学に提出しようと考えて。

ところが、オクスフォードどころか、到着したヒースロー空港で早くも medical check の話になり、私は入国審査の列から外されて医務室送りとなりました。そこで「レントゲンを撮る」という話になったのですが、「スーツケースの中に持参してある」と説明すると、「取って来て良い」ということになり、どうしたのか記憶はありませんが、入国のスタンプをもらわないままターンテーブルにたどり着き、スーツケースを引きずってゲート内の医務室に戻りました。一番下からレントゲン写真を撮りだした私を、何人かのイギリス人がかなり驚いて見ていた記憶があります。駒場のレントゲン写真のおかげで、その場では聴診器での診察で済ませることができました。セントラル・バス・ステーションでオクスフォード行きのコーチを待つ頃には相当に暗くなっており、日本とは 20 度近く差のある寒さが身にしみました・・・。空港でレントゲンを撮っても手間は同じぐらいだったかもしれませんが、その後イギリスの一般向け医療水準はかなり低いことに気づきましたので、これで良かったのでしょう。

この話はすっかり忘れていたのですが、今回のコロナ騒動で、コロナには BCG が有効なのかもしれないという記事を目にして思い出しました。BCG は結核を予防するワクチンですよね。

実は私は、1990 年にも同じような体験をしました。ただし、この時は、日本の結核に対するイメージも少しは好転していたのか、「3 年前にレントゲンを見せて入国した」という話を空港の医務室でしたところ、「あっ、そう」という感じで無罪放免となりました。官庁や企業から保証を受けて留学した方々は、同時期でも同じ体験をしていないようですが（中には「日本は後進国ではない！」と言う幕末の志士のような方も・・・）、1980 年代後半から 1990 年にかけて日本がどう見られていたのかを示す話かもしれないと考え、この機会に記しました。

100 年前のスペイン風邪も 5 月にはおさまった上で、3 波まで来たとのことです（速見融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、2006 年初版、2020 年第 4 刷、244-246 頁のグラフなど）。コロナウィルスの脅威が一日も早く去りますよう、皆様がご健康ですごされますよう、また、今後同じようなことが起こった際には、今回の経験が生かされ、より良い対応ができますよう祈りつつ筆を擱きます。

留学先の Wadham College, Oxford ガーデン

最近のイギリスに思う

木畑洋一

いつの間にか年月は流れ、私がイギリス科を卒業してから今年で半世紀が経過してしまった。その間、イギリスについて研究したり教えたりすることで、暮らしてきた。ニューズレター（このニューズレターを始めたのは私がイギリス科の主任だった時だが、それからでも 20 年以上たっている！）への執筆を依頼されたのをよい機会に、私の研究がめざしてきたことに即しつつ、イギリスの最近の状況について一言述べてみたい。

私の研究の主な対象は、イギリス帝国史、なかでも脱植民地化の時期の歴史である。世界の陸地の四分の一を支配したといわれるイギリス帝国が解体していった過程を検討し、それが世界にどのような影を落とし、イギリス自体にもいかなる影響を及ぼしてきたかを議論してきたのである。それに際して私が考えてきた基本的な構図は、以下のようになる。

イギリス帝国の解体は、時に言われるような平和的なものでもスムーズなものでもなく、世界の各地に多くの問題を残してきた。イギリス自体も、帝国支配国としての意識（私はそれを帝国意識と呼んできた）をなかなか捨てきれずにいた。帝国解体が進み 1973 年に EC（現在の EU）に加盟して以降は、世界帝国の中心としてのアイデンティティにヨーロッパの一国としてのアイデンティティが取って代わる方向性がみえてきたが、帝国意識は色濃く残存し、ヨーロッパ統合の深化にイギリスは距離を置く姿勢をとりつづけてきた。

そのようなイギリスが帝国意識を完全に捨て去り、ヨーロッパの一国としてのアイデンティティを深めていくことは、かつてアジアでの帝国支配国であった日本が帝国意識と決別してアジアの一国としての姿をさらに明らかにし、アジアの平和的な統合を推進することと共振する、と私は考えてきた。日本人である私のイギリス研究の拠り所は、この点にあったということができる。

その私にとって、2016 年 6 月の Brexit をめぐるイギリスの国民投票は、複雑な思いを誘うものとなった。多くの人と同じく、私も、EU 離脱票がかなりの数にのぼるにせよ、結局のところイギリスの人々は EU 残留を選ぶだろうと考えていたので、開票結果には驚いた。特に、その結果を導いた要因の一つとして残存する帝国意識が強く働いていたと見られることは、それが消えていくことを願っていた私にとって、大きな衝撃だったのである。米国のイギリス帝国史家 Philippa Levine も、国民投票の直後に、"Brexit succeeded by playing to Britons' imperial nostalgia"という文章をネット上で発表し、こうした要因を強調した。その後、帝国要因に着目して Brexit を論じる研究はいくつか出てきている。私自身も、"Afterimage of the Empire?—A Background of Brexit"という報告を今年（2020 年）3 月にある国際会議で行う予定にしていたが、新型コロナウィルス騒ぎのためにその会議は流れてしまった。

さて、最近のイギリスといえば、このコロナウィルスに人々が大量感染し、大量に死亡したことに触れないわけにはいかない。ニュースで接するイギリスの惨状には、驚愕したという他ない。老人介護施設で異常に多くの死者が出ていたにもかかわらず、政府がその数字をかなりの間実質的に隠していたことなど、耳を疑う事態であった。

権力欲のもとでヨーロッパ統合への自らの姿勢を転換して Brexit を推進した（それに際して帝国意識を露骨に示すこともあった）ジョンソン首相の率いる政府の対応の遅れがこうした状況を招いたと非難されているが、確かにジョンソンはコロナウィルスの力を軽視したあげく、自らも感染して重症となった。集中病棟に入ったジョンソンの世話をして、彼が退院後に感謝の対象とした病院関係者のなかに、Brexit 推進派が標的とした外国人労働者が二人（この場合は看護師で、一人は EU 内のポルトガルから一人は英連邦内のニュージーランドから）含まれていたのは、皮肉なことであった。近年イギリスの医療体制を支える力となってきたのは外国からの医療労働者、とりわけ EU 諸国からの人々だったのであり、Brexit をとりまく状況のなかで、そうした人々はイギリスを去ろうとしている。

Brexit によって迷走を始めたイギリスが、コロナウィルスで激しい打撃を受けた後、どのような道をたどろうとしているのか。残存する帝国意識が指し示すような世界大国としての位置の復活がありえないことは確かである。また、Brexit への対応同様コロナウィルスへの対応においても違いをみせたイギリス内の各地域の動きが、イギリスという国家自体の形の変容につながっていくことも考えられる。いろいろと検討すべきことは多くあり、私としては、これからもイギリスの様相を注視していきたいと思っている。

2019 年 3 月 29 日に予定されていた Brexit 直後のイギリスを観察するため、4 月初めに訪英したところ、Brexit が延期されたため空振りした。その時、国会議事堂前で Brexit 反対運動の様子を撮った写真。

Professor Tony Claydon

School of History, Philosophy and Social Sciences
Bangor University

Visiting Professor 2019

I am Tony Claydon, Professor of Early Modern History at Bangor University, in North Wales in the United Kingdom. In October 2019 I had the privilege of being a visiting professor at Tokyo University, on the Komaba Campus: it was the second time I had enjoyed this month-long post, and was the first time I had been to Japan in the autumn. This meant I got to see the leaves starting to change colour, and the first snow of the winter on Fuji (which I saw from the centre of Tokyo: in the warm haze of the spring, the time when I had visited before, I had doubted this was possible!). It was a perfect time of year to visit Tokyo: though I did have to stay in my apartment for two days as Typhoon Hagibis (Typhoon No. 19) raged outside. Whilst using the time to write, deliver a lecture and a workshop, and run a five day intensive course for upper level students, I was also able to do some travelling. I went to Nikko, which is one of my favourite places on earth — especially if you can get to the temples and shrines very early in the morning. Professors Nishikawa and Katsuta also took me on a short but very enjoyable tour of western Japan: including visiting Himeji Castle, which has just been twinned with Conwy Castle in Wales. Conwy is an impressive medieval stone fortification; like Himeji it is a UNESCO world heritage site; and it is only twenty kilometres from my university — so I was very interested to go to see its new Japanese partner.

In many ways the highlight of the month was teaching the intensive course, which examined if England in the seventeenth century, under the Stuart monarchs, was the first 'modern' society. This covered ways in which parliament became more powerful between 1603 and 1714 (especially as the result of two revolutions: the English Civil War, and the Glorious Revolution of 1688); the growth of the central state in the period; the achievement of greater religious freedom; and the circulation of new and radical ideas about liberty, science, toleration, and the economy. Perhaps most interesting, though, was our discussion of political debate and new media of communication (the seventeenth century saw the emergence of the popular press as a place where national affairs were debated in a series of bitter print controversies). In many ways, the changes and distortions seen in the seventeenth century seemed to mirror our contemporary age, with the rise of mass participatory politics in social media. We saw the same concerns about the erosion of truth, extreme partisanship, the questionable status of people leading debates, and the dizzying speed of reply, that worry many people today as they see politics conducted in new forums. In this way, we reflected, Stuart England may have been as much the first POST-modern society, as the first modern one. The course was thus as enjoyable as the whole stay in Japan: and I thank my hosts heartily for my time in Tokyo.

鎌倉・報国寺にて

King's College London のサマースクールプログラムに参加して

イギリス科 4 年 小林拓海

昨年の 7 月から 8 月にかけて、私は貴重な機会を得て、イギリスの King's College London (KCL)のサマースクールプログラムに参加してきました。今回はその日々を回顧しながら、応募しようと思ったきっかけやその内容を軸に 1 年前の経験を綴っていければと思います。

留学してみたいという思いは大学入学以前から漠然と抱いていたものでした。しかし、当時の私は専門的なことを英語で学ぶという勇気がなかった上に、強い動機のようなものはありませんでした。そんな私でしたが、イギリス科に進学したことで少しずつその思いを現実にしたいという気持ちが強くなりました。その要因の一つには英語で読む・考える・書くという機会が飛躍的に増え、特に専門的な内容の文献講読には苦戦しながらも、先生方のご指導を通して少しずつ自信をつけることができたことが挙げられます。そんな中、個別面談を小川先生にしていただき、予てから興味のあった国際関係論をイギリスで学んでみたいとの思いを打ち明けさせていただくと、イギリスの大学のサマースクールプログラムや国際関係論に強い大学を推奨して下さりました。この面談を経て気持ちは固まり、サマースクールプログラムに応募することを決意しました。

最初に頭を悩ませたのはどの大学に出願するかということです。多くのサマースクールプログラムは 7 月の上旬といったこちらの S セメスターの終盤に組まれていることが多かったのですが、幸運なことに KCL のプログラムはちょうど参加することができる時期 (7 月 22 日からの 3 週間)に日程が設定されていました。下調べをする中でこの大学の国際関係論コースに対する評価の高さや立地の良さといった点にかなり惹かれており、迷うことなく出願を決めました。いざ出願の手続きを始めると、このような志望動機で大丈夫なのだろうかなどと心配事は絶えなかったのですが、最終的にはどうにか選考には通り、胸を撫で下ろしました。

KCL はロンドンの中心部を流れるテムズ川の両岸に複数個のキャンパスを持つ大学です。私が通うことになったのは主に Strand Campus といってテムズ川北岸のウェストエンドに位置するキャンパスでした。今回私は学生寮付きのプランで申し込みをしたため、そのキャンパスから 25 分ほど離れたテムズ川南岸の地域から徒歩通学をすることとなりました。テムズ川に架かる橋を渡り、道中に並んでいた様々な出店や荘厳な建物を見ながら通学する日々は夢のようでした。大学のキャンパスはさほど大きくはなかったものの、開放的な講堂や色彩に富んだ内装がリラックスして学問に臨める空間を作り出していました。また、建物の外側にはジョン・キーツやフローレンス・ナイチンゲールをはじめとする KCL に

関係した著名な歴史上の人物の肖像画が描かれており、その偉大な歴史を垣間見ることができました。

授業が行われたのは少しポップで半円型のこの教室でした。

ロンドンの繁華街に位置する KCL のキャンパスは都会的な雰囲気を纏っています。

さて私が参加した国際関係論のプログラムには 30 人ほどが参加していました。日本人は私だけでしたが、韓国やタイ、とりわけ中国といったアジアの国々から参加した学生が半数ほどを占めていました。そのほかにもトルコの外交官を務めていた 60 歳ほどの学生さんや学校の先生をしながらも見識を深めたいという理由で参加したアメリカの学生さんもいました。かなり国際色豊かな学び舎だったといっても過言ではないと思います。授業は 1 コマが 3 時間で、前半が講義、その後 15 分間の休憩を挟んで後半はディスカッションをしていくというものでした。講義はハートランド理論、ソマリランド問題、そしてインドの開発事業についてなど多岐に渡り、特に難しい理論を理解するのにはかなり時間がかかりました。それでも先生が適切なタイミングで学生に発言を促したり、質問をかなり積極的に受け入れてくださったりしたことで集中力を維持することができました。ディスカッションでは、例えばハートランド理論の有効性について事例を用いながら考察するといったことやグループである一国になりきり、ソマリランド問題をその国益を考慮した上で検討するなどというように講義の場面で習った基礎的な知識を応用していくことが求められました。インドの開発事業に関するグループワークでは予算を与えられ、それをどのように配分すると持続可能な開発につながるのかということを話し合い、最終的に発表を行いました。かなりの量の資料を分担して、分析し、発表資料を作っていったのは思い出の一つです。様々な文化的背景を持った人たちとグループワークをしたことで、今まで自分が考えたことのなかった観点や新たな見識を得ることができました。

集大成としてのエッセー(3000 words)を気候変動と紛争の関係性について書き上げた後、このプログラムは終わりを迎えました。資料の読み込みや文献探しに追われた忙しい日々でしたが、だからこそ充実感を強く感じることができました。この日々でもらった刺激を糧に、学部生として今後もしっかりと学問に勤しむことができればと切に思っています。

大学院博士課程 3 年で、現在オーストラリアのディーキン大学に留学中の松井洋和さんが、昨年 6 月になりますが、「オーストラリア労働党政権と国際連合の創設―安全保障理事会非常任理事国選出基準に関する議論を中心に―」（『オーストラリア研究』第 31 号、2018 年 3 月、23-41 頁）で、オーストラリア学会第 3 回優秀論文賞を受賞されました。おめでとうございます！

イギリス科の大学院博士課程を単位取得退学した五十嵐奈央さんが、今年 1 月にイギリスのダラム大学（Faculty of Arts and Humanities, Durham University）で博士号を取得されました。博士論文のタイトルは、“‘My Road to Freedom and Knowledge”: Louis MacNeice’s Self-Conscious Art’ です。Many Congratulations!

今年 10 月 17 日（土）に予定されているホームカミングデーは、新型コロナウィルスの感染拡大に配慮し、初のオンラインでの開催になります。新たな試みとなりますが、ご理解のほどよろしくお願い致します。申し訳ありませんが、コモンルームの開室はいたしません。どうぞよろしくお願いいたします。

卒業生の方へ　お礼とお願い

昨年 10 月 19 日（土）の同窓会パーティには、大勢の卒業生の方々に参加していただき、誠にありがとうございました。また、その際には、多くの方から御芳志を賜りました。紙幅の関係上、お名前を記すことができませんが、深く御礼申し上げます。

『イギリス科ニューズレター』は現在、紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記の卒業生専用アドレス

igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

まで、送付先アドレスのご連絡をお願い致します。

また、お届けいただいているご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更などがおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

ニューズレターに関しましては、経費節減と環境への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会の案内など郵送が必要なものもございます。同窓生の皆様に引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。

ご賛助いただけます場合は、下記口座までお振込みいただけますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行
名義：イギリスカ
口座番号：10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。

銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：〇〇八店（ゼロゼロハチ）
口座種別：普通
口座番号：4362167

2020 年度　イギリス科運営委員

後藤春美（主任）、小川浩之（副主任・広報）
中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子、西川杉子
八代憲彦（教務補佐）、清水領（教務補佐）